

博士論文審査および最終試験の結果

審査委員（主査） 亀山 郁夫



学位請求者 宇都弥生

学位請求論文

「近代ロシアにおける二人の信仰者、G. S. スコヴォロダーおよびP. D. ユルケーヴィチ研究——ロシア哲学史の再構築のために——」

<審査の結果>

ウクライナ出身の二人の哲学者グリゴリー・スコヴォロダーとパムフィール・ユルケーヴィチの生涯と思想に光を当てたわが国初の論考である。論文構成の面で若干の問題は残るが、これまで謎とされ、多年にわたる政治的事情からまったく顧みられることのなかった二人の思想家に果敢に立ち向かい、膨大な文献を渉猟し、ロシア人の研究者にとってすら難解とされるその著作の深い読解をとおして、一大論文に纏め上げた能力は高い評価に値する。審査委員会は、厳正な論文審査、事前審査および最終口答試験を経て、申請者の非凡な力量と知的探究心の深さを認めたので、全員一致で申請者に博士（学術）の学位を授与することとした。

<論文概要と評価>

わが国におけるロシア思想史研究の歴史は浅く、いくつかの個別的な研究はあっても通史として一つに纏められたロシア思想史はいまだ書かれていないというのが現状である。こうした状況の中で宇都氏がねらいとするところは、「ロシア哲学史」を構築である。氏の言うように、ロシアでは1825年のデカブリスト事件以後、大学での哲学の講義が禁止され、アカデミズムの哲学に代わって、ゴーゴリ、ドストエフスキー、トルストイら作家や、チェルヌィシエフスキーら社会評論家が文学作品や評論を通じて哲学を論じるという伝統が生まれた。それゆえ、英、独、仏におけるように独立した学問領域のなかで哲学思想を論じる哲学者を輩出することはなかった。これに加えて、近代西欧との接触によるロシア知識人の思想的営みを論ずる場合、「正教」、「ロシア」という特殊理念を前提としない純粋に哲学的・神学的な関心に基づく思想的営みはこれまでほとんど顧みられることがなかった。たとえば、ロシア哲学史の代表的な著作として知られるラドロフ『ロシア哲学史概観』、マ

サリク『ロシアとヨーロッパ』、ゼンコフスキー『ロシア哲学史』、ロスキイ『ロシア哲学史』(これらの多くが20世紀初頭、ロシアでは象徴主義文化が開花した時代に書かれた)でも、「ロシアの特殊性」にことさらに強勢が置かれる場合が少なくなかった。

そうした知的雰囲気直視しつつ、ロシア哲学には独創的なものがなかったと断じたのがグスタフ・シュペートとボリス・ヤコヴェンコであり、宇都氏は本論文の執筆にあたってこの指摘に大いに触発されたと述べている。同氏の考えでは、新たな哲学史の構築においては、ロシアの特殊性というローカルな要素をいったん排さなければならない。そしてその立場から浮上してきた哲学者こそ、すなわち、ロシアを相対化するまなざしをもち、かつ独自の哲学的営みを行った人物として宇都氏が注目した哲学者こそ、18世紀の放浪哲学者スコヴォロダー(1722-1794)であり、また、さらに100年の懸隔を隔てて登場するモスクワ大学哲学教授のユルケーヴィチ(1826-1874)であった。前もって述べておかなら、思想史研究、哲学史研究におけるロシアの特殊性を排するという宇都氏の初発の問題意識については、審査員の側からいくつか疑問が提出されたが、これについては最後にもう一度触れることにする。

スコヴォロダーは18世紀に生き、もっぱら聖書をもとに思索を展開した「放浪」哲学者であり(生前、自分の著作を何一つ出版することがなかった)、その著作は自筆原稿とその写本という形で近い友人の間に広まったにすぎない。にもかかわらず、20世紀に入ってから、「ロシア精神の体现者」、「ロシア最初の哲学者」としてにわかに脚光を浴び、再評価されるにいたった。他方、ユルケーヴィチは1860年代に唯物論論争に加わり、その反唯物論的立場が評価されて、再興なったモスクワ大学の哲学講座の教授につき、西欧哲学に徹底して向かい合った学究的な哲学者である。今日、彼は、ロシア「唯一の」哲学者としばしば目されるヴラジーミル・ソロヴィヨフの師となる人物として知られ、さらにはトルベツコイ兄弟、ブルガーコフ、フランク、フロレンスキー、エルンらにも影響を与え、20世紀初頭ロシアにおける「文化ルネッサンス」(ベルジャーエフ)を準備した哲学者といわれる。しかし、ユルケーヴィチの哲学はその後(当然ではあるが)ソヴィエト時代に完全に黙殺され、再評価のきざしが生まれはじめたのもようやくペレストロイカに入ってからのものであった。スコヴォロダー、ユルケーヴィチに共通するのは両者がともにウクライナ出身であり、キエフ神学アカデミーの出身という事実である。総じてロシアを相対化できるポジションにあったという点が重要なのだが、すでに述べたとおり、スコヴォロダー、ユルケーヴィチともにわが国において先行研究が皆無であることを指摘しておきたい。

論文は全体で二部構成からなっている。第1部はスコヴォロダー、第2部はユルケーヴィチに関する叙述にあてられ、それぞれ第1章は「スコヴォロダーの生涯と思想」、第2章

は「スコヴォロダールの思想」、他方、第2部の第1章は「ユルケーヴィチの生涯と著作」、第2章が「ユルケーヴィチの思想」とシンメトリックな構成をとっている。つづいて、「結びにかえて」と題する総括があり、巻末に膨大な文献目録が付されている。

宇都氏は卒業論文でスコヴォロダールを取り上げてから、一貫してロシア哲学思想史を研究テーマの中心にすえ、修士論文はじめとする4本の研究論文のいずれもがとくにその先駆性の点で高い評価を受けてきた。今回の論文はそれらを集大成したものであり、約12年におよぶ長い研究の蓄積が随所に感じられるものとなっている。すでに述べたとおり、スコヴォロダールは哲学者である前に詩人であり、バンドウーラを奏する放浪の吟遊詩人であった。したがってその著作のジャンルも、詩、寓話詩、音節詩、寓話、論文、対話篇、譬え話と多岐にわたるもので、宇都氏によれば、「厳密な概念規定に基づき、自己の思想を系統立てて述べていくタイプの哲学者」ではなかった、「スコヴォロダールの著作は聖書からの引用やアレゴリーに富み、彼の思想は総じて論理的というより、象徴的である。つまり、スコヴォロダールは自己の思想を明確な概念の大地に縛りつけるのではなく、むしろそこから自由にあちらこちらへと飛翔させていた」とされる。そうである以上、スコヴォロダールを論じる場合、論者は、たんに論理的思考に頼るのではなく、研ぎ澄まされた感性と宗教的とでもいうべき深い内面的体験を備えていなくてはならない。ここにスコヴォロダール研究の難しさがあるが、宇都氏は持ち前のすぐれた感性と集中力でもってこの謎の思想家に肉迫する。

スコヴォロダールは真理の探究において、高度な学問的・専門的知識は必要ないと考えていたため、著作の中では過去の哲学者、神学者の著作からの引用箇所を明示することもなかった。このことがスコヴォロダール哲学の解釈を困難なものにし、これを論ずる者は、聖書は無論のこと、プラトンを始めとするギリシャ哲学にまで通じていなくてはならない。学問的・専門的であるかわりに、該博であることがこの哲学者の条件なのである。こうした哲学者の真髄に迫ろうとする至難の業を、宇都氏はスコヴォロダールの思考の中核をなす「無からの創造」に注目することで可能にしている。「永遠の意志は、自己の全き様を、可視物を現すことによって表現しようと望み、無から、精神的・肉体的に存在しているもの全てをつくった。永遠の意志のかかる望みは心に観念を、その観念は様相を、そしてその様相は物質の姿を身にまとったのだ」。この難解な表現の中に、可視的自然としての被造物、不可視的自然としての神を見、不可視的自然＝神は全被造物に浸透し、かつ包含しているという基本構図を宇都氏は把握する。しかもこうした解釈に行き着く前提として、スコヴォロダールは「あるひそかな力」を感じとる「元体験」の重要性を説いている。主・客を超越した西田哲学の「純粹経験」にも似たこの「元体験」を通して、スコヴォロダールはソク

ラテスの「無知の知」、クザーヌスの「学識ある無知」の境位にたどり着くという。

18世紀は、西欧はもとより、帝政ロシアも科学万能の時代であった。こうした時代状況の中で、スコヴォロダーは科学という名の「暴力的知」の跋扈を批判する。「コペルニクスの球体を捨てよ」という発言にも見られるとおり、自然科学的知は「大地から大地へと帰ってゆく補助的な科学」にすぎない。それを宇都氏はこうまとめている。「スコヴォロダーの科学批判の要諦は、人間による乱暴な知性の用い方にある。何でも知りたがる傾向を持つのが人間の精神の性向である。それゆえ人間の欲求には際限がない。そしてあらゆる分野でそうした欲求を満足させることに知性を用いてきたのが、ロシア18世紀の時代精神、自然科学的知に代表される合理主義ではなかったか。それは『拡散的な知のあり方』、『傲慢かつ暴力的な知のあり方』であり、ひいては18世紀のみならず西欧近代合理主義にもっとも顕著な、これを根底から規定していた知のあり方ではなかったか」。こう述べたうえで、宇都氏は、哲学とは「知」ではなく「智」の探求だといい、しかも「科学(nauka)」の語はラテン語でもロシア語でも「知」にとどまらず、「習慣となった教え」なのだという。さらにこう捉えることで、学=教えが行為となるという彼の知行合一の思想の独自性が見えてくると主張する。スコヴォロダーはまた、神の言葉(ロゴス)を食物にたとえ、その言葉の意味を「味」と表現した、この「味」を解するには、なによりも咀嚼が前提となる、さらに、神の言葉の「呼び招く」声が聞こえる耳、聴覚をもたねばならない。なぜなら、聴覚こそは、視覚よりもはるかに倫理的な性質を帯びて、形而上的なものの知覚へといざなうからである。世界の始原に耳を傾けようとするスコヴォロダーのこの基本的態度こそ、19世紀末のロシアに起こる終末哲学ないしは象徴主義哲学の誕生を予言するものにほかならない、と宇都氏は考え、その未来性に着目するのである。また、スコヴォロダーのいう不可視性(神)が可視性(万物)に浸透するという表現をめぐって次のように書いている。「すなわち、形而上的知はわれわれに見えないだけで、形而下の事物に根づいている。完全には知りえないものながら、知りうるものとしてある。『あらわれん』とするのが真理だからである。知の分水嶺はわれわれの心にあるのであって、可視の側にしか目を向けなければわれわれの知(水)の全てはそちらのほうに流れていく。また闇と光を分ける壁もわれわれの心の中にあるのであって、光を浴びるためにはただ心の壁に窓を開ければよい。……スコヴォロダーによれば知の根拠どころか、そもそも存在の根拠は現れでんとする不可視の神の力にあり、それはわれわれの知の力だけでは乗り越えがたい壁、山(高み)なのである。それゆえ信仰という心でその壁、高みを見つめることによって初めて『不可視の自然は露呈し、表に現れ出て』われわれに理解されることになる」。これは、スコヴォロダー哲学の真髓を伝えるみごとなパラフレーズと評価できる。いや、パラフレーズと

いう以上に、スコヴォロダー哲学の凝縮した姿をここに見ることができる。

論文の前半部は、スコヴォロダー哲学の紹介を基本とするが、その真髓の確認にいたるまでのプロセスには、著者自身の並々ならぬ内面の深化が感じられ、筆致も闊達である。欲を言えば、そうした思考の筋道をより説得的に跡づけるために、哲学者自身が好んで用いた寓話、譬え話などをより積極的に盛り込み、それらの意味論的な解析や構造分析をとおしての別の角度からのアプローチも必要だったのではないか。そうはいえ、この謎の哲学者の思想を文字通り「咀嚼」、「吟味」し、ここにその思想の真髓を明らかにした力量は高く評価できるとの点で審査員全員が一致した。

第2部のユルケーヴィチ論では、つい最近まで光が当てられることのなかった神学大学における哲学の伝統が再現され、その代表者としてモスクワ大学哲学教授ユルケーヴィチの思想的営みが考察の対象となる。これもわが国ではまったく未開拓の研究分野、ほとんど未知の哲学者であって、スコヴォロダー同様、先行研究は皆無にひとしい。というよりロシア本国でもその再評価が始まったばかりである。ユルケーヴィチという名前から、ロシア思想史において一般に連想されるのは、革命的民主主義者チェルヌイシェフスキーの「哲学における人間学的原理」に論争を挑んだ「反動的観念論哲学者」のレッテルである。いや、そうしたレッテルや色眼鏡をとおしてみるのがむしろ従来の思想史研究の常道とされ、ペレストロイカ期に入るまで彼の思想をまともに取り上げる知的風土が少なくともソヴィエト時代のロシアにはなかった。しかし、その彼が、再興なったモスクワ大学の哲学教授として、ウラジーミル・ソロヴィヨフやロシア・ルネッサンスの思想家たちを育てたことはまぎれもない事実であって、その意味でここにユルケーヴィチの哲学的営みを明らかにするという試みは、長年、わが国で議論されてきたロシア思想史の枠組みを反転させる意味をもつものである（「再構築」という自負もここから生まれている）。同様に、ロシア哲学を西欧哲学と切り結ぶことのできる知的水準がどの程度のものであるかを推し量る格好のよすがとなる。この点で、わが国で他に先んじてユルケーヴィチに着目した先見性は特筆に値するし、また、本研究は、ソ連崩壊後、社会主義や唯物論の呪縛からはじめて可能となった、若い世代ならではの新たな知的地平と呼ぶことができよう。

本論文（第2部）では、そのユルケーヴィチの主著である「プラトンの教説における理性とカントの教説における経験」（1866）を中心に論が進められる。ドストエフスキーの『罪と罰』と同年に出版された著作で、ユルケーヴィチは自身の哲学的支柱であったプラトン哲学とカントの『純粋理性批判』を対比させ、カントの不可知論に基づく形而上学を批判的に乗り越え、純粋理性の真理を再度承認することをめざした。ユルケーヴィチの考えでは、カントが「純粹・不変の意識」を「自己自身の意識」（「超越論的統覚」）とし、「わた

しは考える」と結びつけたのは大いなる誤謬であった。カントの主張によるかぎり、存在のあるところに認識はなく、認識のあるところには存在はないとされるが、これはプラトン流に「真理の意識」とされねばならないというのが宇都氏の結論である。この結論にいたるまでの叙述は難解かつあまりに抽象度の高いものであるため、細部にいたる議論については、じかに論文に目をとおしていただくほかない。

〈公開審査での議論と結論〉

7月14日に行われた公開審査では、ロシア性ないしロシア的特殊性を排しつつ、ロシア哲学をじかに西欧哲学の流れにリンクさせることで、従来のロシア哲学史のパラダイムを切り替え（新たなロシア哲学史を構築し）ようという問題意識そのものの有効性をめぐる疑念が表されたことを明記しておく。さらにスコヴォロダーとユルケーヴィチを二部構成で並列させるだけでなく、両者の比較、継承性をより説得的に展開すべきであったとの意見が出された。また、両者の哲学をさらに有機的につなぐことのできる契機は十分あるとの助言もなされた。また、後半のユルケーヴィチ論については、彼の哲学の根幹をなしているプラトン解釈が十分に分析しきれていないため、少々説得力に欠けるうらみがあるとの意見も出された。

しかし、そうした不満は残るにせよ、これまでほとんどその全体像が知られることのなかったスコヴォロダー哲学の真髓を明らかにし、また、ユルケーヴィチ論については、政治的事情からほとんど顧みられることのなかった神学大学での哲学議論を明らかにし、その歴史的系譜に光を当てた功績は高く評価されるべきであるというのが審査員全員の一致した意見であった。また、ロシア哲学の普遍性、ないしロシア哲学のもつ意味をより世界的な視座から明らかにしようとする初々しい問題意識を賞賛する声もあがった。以上、審査委員会は、本論文の先駆的な意味、独創性を高く評価し、全員一致で、博士（学術）を授与するにふさわしい研究であるとの結論に達した。